

彙 報

木簡学会第一回総会および研究集会

木簡学会の第一回総会および研究集会が、一九七九年十二月一日と二日の両日、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館において行われた。大会当日には、紙の香も新しい『木簡研究』創刊号が会員の手元に届けられ、また、充実した報告と活発な質疑応答が繰り広げられて、木簡学会の運営が実質的な軌道にのつたことを印象づけた。総会および研究集会の内容は、左記の如くである。

◇十二月一日（土）午後一時から

第一回総会（議長 野村忠夫）

挨拶（岸俊男会長）木簡学会設立の経緯および学会の性格・

会誌・会費についての説明があった。木簡学会は、対象とする木簡の性質上、会場の選択が限定され、あまり多くの会員が一堂に会することは困難であるが、研究集会での成果は、会誌を

通じて、できるだけ広く会員外の方々にも知っていたいこととしたい。それで、会誌の編集を会の事業のなかでもつとも優先させ、発掘機関の協力をえて、毎年、各地で出土する木簡の情報を探していただき会誌に反映させる。高額の年会費は、出土木簡に関する正確な情報を入手し、学会に提

供するための活動資金であり、会員の篤志をあおぎ、学会の維持につとめたい。

会務報告（田中稔委員）一九七九年三月三十一日・四月一日

に行われた設立準備総会および記念講演会・研究集会（四四名参加）の経過説明。現在の会員数は百名を少し超えている。『木簡研究』創刊号の内容。会誌『木簡研究』の編集方針は、まず第一に、新しく出土した木簡に関する情報を掲載する。どのよくな木簡が、どのような遺跡から、どのような状況で出土したかを、各発掘機関の担当者にお願いして、報告していただく。

第二に、既に報告すみの木簡についても、年度をさかのぼり、

訛文および出土状況を確認しなおして掲載するほか、木簡に関する論攷、あるいは研究集会での報告を再録する。『木簡研究』

創刊号は五〇〇部印刷し、三〇〇〇円で頒布（郵送の場合は三三〇〇円）。今後の大会開催日は、特別な事情のない限り、十二月の第一土曜日と日曜日としたい旨、報告があった。

会計報告（狩野久委員）一九七九年度会計の中間報告（十二月一日現在）。これは、木簡学会の会計年度を四月から翌年三月

末までとするのが適当かと判断されるのと、会誌が出来上ったばかりの現時点では、印刷代が未払いであり、会誌売上げがいくらになるか不明なためである。本年度の決算は、時期的な面で問題を残すが、来年度大会で報告したい。こうした状況であ

るため、来年度の予算を組むまでに至っていない。年会費一万円は、学会の活動資金と会誌制作費の補填（五〇〇部を印刷し、三〇〇部を販売）にあてるという基準から算出した。

報告の後、会誌編集への注文や、会員の数のことについて、意見が寄せられた。

総会終了後、研究集会までの時間を利用して、九州歴史資料館と奈良国立文化財研究所の御好意により、福岡県太宰府町の宮ノ本遺跡第一号墓から出土した買地券のビデオテープ（赤外線テレビ）が公開された。解説は岸俊男。

研究集会（議長 青木和夫）

午後二時三五分から午後五時四〇分まで、左記の報告が行われた。岸報告は、『木簡研究』第二号に収載し、丸山報告の要旨は、一九七九年出土の木簡の項に述べられている。

木簡と大宝令

鴨遺跡出土の木簡

丸山竜平

岸 俊男

なお、鴨遺跡出土の木簡について、佐藤宗諄から補足説明があり、「薌員」の対象は、延喜式の近江国交易雜物にみえる刈安草など種以外の可能性のあることを示された。

懇親会 午後六時から、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研修室で行われ、親睦を深めた。

◇十二月二日（日）

研究集会（議長 原秀三郎）

午前九時十五分から正午まで、左記の報告が行われた。いずれも本号に収載できたので、参照していただきたい。

道伝遺跡出土の木簡
平安京内膳町遺跡出土の木簡

平川 南
平良泰久

袖井遺跡出土の木簡

柴原永遠男

研究集会終了後、午後一時からバスで藤原宮跡にむけ出発。藤原宮東面北門を中心とする第二七次調査地を見学。奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部で出土したばかりの木簡を見学後、現地で散会した。

第二回委員会（十二月一日）

第一回総会に先立って、午前十時から開催され、新入会員の承認、事務局からの会務報告・会計報告の審議、総会運営について協議がなされた。

第三回委員会（一九八〇年六月五日）

奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館において、午後三時から開催。新入会員の承認、会務・会計の経過報告、『木簡研究』創刊号の内容・体裁についての反省と、第二号の編集について、話し合いが行われた。